

社会科地域学習における文化財の活用（前編）

～博・学・民協働による越谷市保存民家の活用実践から～

六本木 健 志（文教大学教育学部）

村 田 三 恵（元調布市武者小路実篤記念館専門員）

Utilization of Cultural Assets in Learning about Community in
Social Studies Classes (First Part) :

Focus on Practical Educational Use of Preserved Traditional
Houses in Koshigaya City through Cooperation between
Researchers, Teachers and Citizens

ROPPONGI TAKESHI, MURATA MIE

(Faculty of Education, Bunkyo University)

(Previous affiliation: Mushakouji Saneatsu Memorial Museum)

要 旨

社会変化が住民の移動をとめないながら激しさを増す現代にあって、伝統的な地域文化の継承が困難な状況にある。本研究では、この課題に小学校社会科の地域学習がいかに応えていくかを、博・学・民協働による地域学習の展開として行われた実践を分析し、そこで得られた成果・課題を明らかにする（前編）。それを踏まえ、子どもたちに地域文化に寄せる眼を養い、現代社会においてそれを学ぶことの意味を考えさせる学習指導のあり方を提示する（後編）。

1 はじめに

住民の交代が激しい現代に於いて、地域の歴史・文化を継承することは、個人では困難な時代になっている。そのような状況下で、学校教育が、先人が歩んできた歴史と文化とを伝える役割は大きい。小学校社会科の学習指導要領にも「博物館や郷土資料館等の施設の活用を図るとともに、身近な地域及び国土の遺跡や文化財などの観察や調査を取り入れるようにすること。」という記述がある。博物館もまた、「博物館は、その事業を行うに当っては、土地の事情を考慮し、国民の実生活の向上に資し、更に学校教育を援助し得るようにも留意しなければならない」¹⁾ という目的を持つ生涯教育機関である。この目的の下、学校教育と連携、補完しあいながら、地域の歴史文化を継承していく役割を持つように取り組んでいる。このような方針に基づき「博学連携」といわれる事業は、博物館を

主体として広く日本各地で展開されている。

しかし、実際の連携方法や事業内容は自治体と施設に一任されているのが現状である²⁾。

また、昨今の経済状況に於いては、博物館や文化財を活用するために必要な人員も予算も不足しており、博物館の教育普及の内容も、博物館を利用する教師へのサポート体制も不足しがちである。ゆえに、せっかくの博物館への社会科見学の機会でも、学校と博物館や自治体の意思疎通が円滑でない場合には、生徒も教師も、授業に必要な解説も体験も出来ず、ただ見学をするだけの行事になってしまふことが多い。このような現状を勘案し、2016年度に、文教大教育学部社会専修六本木ゼミの学生と越谷市文化財調査委員の有志は、学校と博物館の双方が、効率的に文化財の活用を可能とし、地域学習の深化もはかる内容の事業を試みることとなった。これが、地域資料を活用するために越谷市大間野町旧

中村家住宅を整備する事業である。

事業の詳細は後述するが、この事業で学生が体験し、身につけた技能と知識は、教員となった後にも、教材研究と「実感できる授業作り」に役立つものであり、将来的に教員教育の一助となり得る。同時に、教員を目指す学生が、地域の歴史文化を体験し会得することにより、次代に地域文化を継承する機会を作っていくことも目的とした事業となっており、教育における地域との協働事業を行うマネジメント力の基礎を培うことにもなる。

地域学習を支える生涯学習施設である博物館の事業の目的は、博物館法の第一条「社会教育法（昭和二十四年法律第二百七号）の精神に基き、博物館の設置及び運営に関して必要な事項を定め、その健全な発達を図り、もつて国民の教育、学術及び文化の発展に寄与することを目的とする。」という一文に帰結している。この目的を有する博物館の事業は、研究、保存、公開の基軸があり、その成果を以て、生涯教育に寄与していくものである。博物館は実物資料を展示し、それに触れる教育普及活動を行うことによって、文化を継承し、知識を高め、精神的向上を促す装置として機能している。博物館の教育機能は、実物資料を有することで、他にはない効果的な内容を持ち得るのである。この実物資料や体験を以ての学習を、学校教育の教材にフィードバックする作業を本事業では行っている。越谷市は博物館がないため、学生はまず古民家を活用し、歴史・民俗資料を保存する作業を行い、実践的に資料の用途を学び、身につけながら、小学校の学習単元を学習指導要領に沿って学べるわかりやすい教材や展示を作っていた。次に、自らが作成した教材と整備した展示を用い、小学校3年生の社会科見学に於いて解説を行った。この事業における成果は次の通りである。

- ・教員を目指す学生の資質を高めるとともに、地域の文化財を利用した教材作成と指導能

力を高めたこと。

- ・教育現場に対して社会科見学の事前に本事業で作成した教材を配布することにより、児童の予習・復習と教員の指導の深化を可能とし、小学校より一定の評価を得たこと。
- ・古民家において、資料の保存とともに、社会科見学の際に、指導要領に沿った展示と体験学習の内容を組み立てた。これにより、実物資料を用いる地域史料を活用した教材提供を可能にする作業となり、生涯学習施設として機能させることが出来たこと。

このように、教員志望の学生、学校、今回の事業により社会教育施設として機能させた古民家の三者とともに、実践的に役立つ成果が上げられた。本事業は、教員を目指す学生の資質の向上と、将来的な教員教育を可能とするものであった。同時に、学校と博物館などの生涯教育施設の人員と予算不足を補い、互いの施設や自治体が一方通行ではなく互いに資する事業とし、地域文化を継承する仕組み作りに寄与する内容となっている。

本稿では、本事業の詳細について、「事業の目的」「実施条件」を述べ、「実務内容」について報告し、最後に「事業の成果と今後の課題」について述べることとする。

2 越谷市保存民家（大間野町旧中村家住宅）活用事業の目的

本事業は、学校教育の中での文化財の活用を円滑にし、地域の中での歴史資料保存と活用とを促進することを目的とする。教育学部の学生が、文化財の学校教育での活用を核として、博物館および地域社会と連携し効果的な地域学習を実践することを目指したものである。

そもそも越谷市は、地域の史料を公開、活用する基幹となる博物館を持っていない。そのため、小学校における社会科見学は、他の自治体の施設にゆだねることが多く見られる。市内には児童館や科学技術体験センターはあ

るが、博物館のように越谷市外に対しても地域の歴史文化を発信するような身近な教育普及施設が存在しないために、市民はおのずと歴史や民俗資料を目にし、接する機会が少ない。展示や専門職員によるeducationも、博物館が児童の調べ学習などに専門的に質疑応答を行うreferenceを体験する機会も多くない。専門的な知識を持つ職員を配置する博物館を有する地域に比べて、実際に見学や体験学習をする機会が少ないことは否めないのである。実際に地域の歴史資料を見学し触れ、体験することは、児童の記憶に残りやすく学習効果を高めることとなる³⁾。

しかし、越谷市内に於いては、小学校の社会科見学についても、解説と体験学習を踏まえた効果的な見学を行うことは難しい状況であった。その状況を改善するために、越谷市の文化財調査委員を務める大学教員と学芸員が発案し、実施したのが本事業である。事業の第一歩として、越谷市が管理運営する大間野町田中村家住宅の展示を、市が所蔵する歴史・民俗史料により充実させることによって、学校教育と生涯学習における文化財の活用の向上を目指す協働事業をスタートさせることとなった。

3 実施条件

以下は、越谷市に於ける文化財活用の拡充事業に対して与えられた条件である。

- ・越谷市所管の古民家は2軒
- ・整理、活用されていない歴史・民俗資料が多数存在
- ・古民家内でのテーマを持った展示が不十分
- ・歴史・民俗資料をあつかえる職員が不在
- ・古民家には文化財の専門職員の配置はない
- ・考古資料以外の歴史・民俗資料を整備する予算がない

この条件下で、文化財を取り扱う訓練を受けていない教育学部生との連携が可能であり、教員志望の学生が能力を最も発揮する事業内

容は、学校教育での文化財の効果的な活用促進のための事業であった。つまり学習指導要領に対応する資料活用の整備事業を目指すこととなったのである。

そもそも、博物館はその研究成果を教育普及事業に還元している。展示には常設展示、特別展示などがあるが、いずれにしても学芸員は、社会科見学を含め来館者が何度訪問しても、常に一つでも新しい知識を得られるように、研究成果の最新の情報をいつでも提供出来るように努めている。そして研究に基づいた展示を含む教育普及活動の中で、来館者が「自分自身で学ぶことの楽しみ」を得る機会を増やしていくことを目標の一つとしている。ただし、施設ごとの予算や職員の資質により、その内容には差があることは事実である。ともあれ、このような役割を持つ博物館や専門職員を持たない越谷市に於いては、博物館の機能の一部である教育普及の機能を古民家に持たせることこそが、地域の歴史文化に触れる機会を増やすために早急に必要であった。ゆえに、古民家を地域学習に供するに足る施設として機能を拡充させる事業を目指したのである。この目標のもと、2016年当時、越谷市文化財調査委員であった六本木と村田が起案し実施する運びとなった。その後、同じ越谷市文化財調査委員の板垣時夫氏と栗田孝夫氏と意見交換をし、詳細な事業内容を組み立てていった。調査委員は、大学教員、学芸員、小学校教員の経験者であり、それぞれの現場で抱える教育普及活動に関する課題を持ち寄り、学校教育における文化財の有効活用を可能とするための事業を構築していったのである。それぞれの立場からの課題提起により、大学・小学校・博物館がお互いに一方通行にならない効果的な事業を考えていくことが可能になっていった。そして、事業を開始し、実際に作業を行っていくことにより、具体的に問題点が浮かび上がり、それを少しずつ解決していくことで、事業が深化を見せ

ていったのである。

4 実務内容

以下、事業の概要を述べていく。実際の作業工程については、学生に向けた資料調査事前事業概要と(3)の資料調査手引書を例示しながら後述する。

大間野町旧中村家住宅における資料調査

事前授業概要

(1) 目的

文教大学教育学部社会専修六本木ゼミと越谷市文化財調査委員が協力し、越谷市教育委員会が所蔵する古民家と民具を中心とした歴史資料の調査を行い、昔の暮らしに関する理解を深め、学校教育および生涯学習に役立つ学習資料を作成することを目的とする。

(2) 予定する実施内容

<事前調査・授業>

①文化財調査委員(村田)による施設と資料の事前調査

②文化財調査委員(板垣時夫氏)による越谷周辺の農業や農具の特徴を知る授業

③文化財調査委員(村田)による、資料の取り扱い説明および展示テーマ作りに関する説明

<具体的作業>

①大学生が現存する民家において、部屋の使い方、道具の使い方、暮らし方などの解説を専門家から受け、昔の暮らしについての理解を深める。

②小学校における授業、および、展示に利用可能なデータを作成する。

- ・調査カードを取り、整理をする
- ・保存のため、掃除や手入れを行う
- ・調査カードの基本データに「道具から知る昔の暮らし」や「郷土の歴史」の授業に役立つデータを付与し、詳細なデータベースを作成する

③作成したデータベースをもとにしたワーク

シートとハンドアウトの作成

④展示計画と実施

⑤展示活動と解説の実施

⑥調査報告書の作成

(3) 調査の手引書

大間野町旧中村家住宅 資料調査の手引書

I 本調査の目的

旧大間野町中村家住宅の収蔵資料、及び、教育委員会に収蔵されている資料の整理カードの作成とデータ化を行い、そのデータをもとに、キャプション(展示解説文)、ハンドアウト(配布用プリント)を作成し、学校見学を行う小学生と一般来館者の学習効率をあげることを目的とする。

II 詳細なデータベース作成による利点

i) 精密な整理カードを作成し、同時にデータベース化することにより、状態に見合った利用や保存作業が可能となり、より安全な保存が可能となる。

ii) データベースの検索により、データ→実物という必要に応じた段階を追った資料利用を可能とし、資料提供や展示、学習教材の利用等により正確で迅速な対応が可能となる。

III 調査によるデータ活用の展開

データを活用することにより、以下のi)～iii)の内容を深化させることが出来る。今後の展開を考え、自分なりの資料活用方法を考えていって欲しい。また、資料の活用と教材利用に関して、資料調査を進めながらテーマを定めていくこととする。

i) 民具の用途と当時の生活様式を調べ、現代の生活用具や生活様式と対比させることにより、知恵と努力によって便利になっていく様子を明確にする。

ii) 道具の用途と歴史を知ることにより、昔の暮らしの知恵や、電気を使わない時代の生活様式を知り、エコロジカルな生活を現代の生活で取り入れるための知恵を明確に

する。

- iii) 農地や用水の開発などと関連付け
現地調査により、郷土の歴史を明確にする。

IV 資料整理手順

i) 現状の撮影

整理前の状態の資料を撮影する。保存されてきた状態を確認し、物品の有無を確認する。

ii) おおまかな分類

大間野町旧中村家住宅、および、市が所蔵する同時代に利用された民具を用途別に集める。土蔵の中の未整理のものについては、いったん取り出し、何があるか把握する。

- ①同じ箆笥や長持、部屋や箱の中にあるものは、種類別にまとめる。
②細かいものは封筒や保存箱に入れ保管する。

iii) 農具の分類・調査準備

農具は稲作、畑作の作業手順ごとに見やすく並べなおす。①～⑧を参考にすること。

- ①耕作地の整備用品…牛馬の装具、水路・畦・溝の作成道具など
②移動用具…しょいこ、もっこ、牛馬の装具など
③植え付け準備用具…竹すのこ、竹かごなど
④草取り用具…鎌、立鎌など
⑤刈り取り用具…大鎌など
⑥加工用具…せんばこき、足踏脱穀機、からさお、箕、唐箕など
⑦保存用具…ムシロ、俵など
⑧食品や製品への加工用品…石臼、臼杵、押瓦、焙烙など

iv) 民具の分類・調査準備

大雑把に、古民家の中の史料を分類する。

- ①民具は、衣食住で分類する。
②用途別にまとめる。
③上記②の資料について、年代がわかれば年代順にならべる。

v) 撮影

- ①おおまかにまとめた民具や農具をデジタルカメラで撮影する。

- ②前後裏表4方向から撮影する。

※資料の大きさがわかりやすいように、スケールと一緒に撮影しても良い。

V 資料のクリーニング

- ①民具の状態に留意しを専用のハケでサビやほこりをはらい乾いた布で拭く。

※場合により中性紙などで保護をする。

- ②手紙や証文など細かい資料は中性紙の薄葉に包んだり、封筒に入れて保管する。

VI 調査カードの作成

この作業は時間が限られているので、資料の配置、撮影、計測、状態確認と撮影を優先すること。

- ①資料番号を描いたホワイトボード、もしくは、紙を置き、撮影する。
②写真を添付されたカードを印刷する。
③資料の大きさを計測する。
④破損部位など資料の状態を確認する。
⑤用途を調べ、データベースに入力する。
※⑤の作業については、進行度合いをみながら、同一史料群ごとにある程度まとめて調査、記入する。詳しい内容は後ほど調べること。

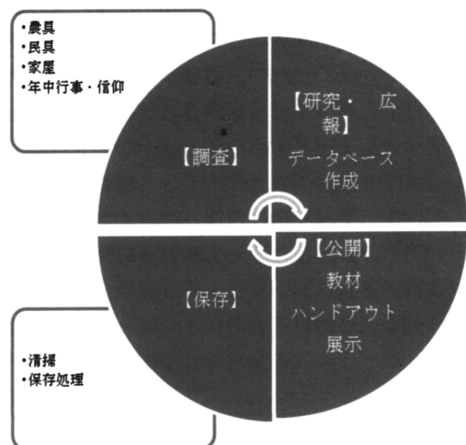
VII データベースの作成と取り扱い

- ①調査内容をエクセルに入力していく。
②データベースは、大学と資料を所管する越谷市教育委員会でも所有する。今後の協働事業に役立てることとする。資料の利用については所有権、著作権に基づき利用することとする。
③上記②を発展させて、今後は教材作成、研究、展示、広報に利用できる基礎資料として、さらに詳しいデータベースを作成する。

VIII 調査内容と調査カード（データベース）

次の事業展開のイメージ図を元に、今回の調査における自分の調査テーマを考えてみる。各自のテーマを深化しつつ、共同研究を進めていく。

データベースを利用した事業展開のイメージ



| | |
|-----|---|
| 古民家 | <ul style="list-style-type: none"> ・住民の履歴 ・地方の風土・歴史 ・部屋の使い方 |
| 農具 | <ul style="list-style-type: none"> ・使用方法 ・使用年代 ・由来 (入手ルート) ・現代の道具との比較 |
| 民具 | <ul style="list-style-type: none"> ・使用方法 ・使用年代 ・由来 (入手ルート) ・現代の道具との比較 |

IX 今回の作業と目標

i) 歴史・民俗資料の基礎調査

- ①古民家の造りや、民具と農具の大きさ、用途、使用年代、生産地を明確にする。
- ②民具の用途を知ることにより、現在の生活道具や、生活様式との比較をする。
- ③民具、農具の保存状態を確認する。
- ④書籍や紙資料の状態と内容確認をする。
上記①～③の内容を調査カードに入力し、写真を添付してデータベースを作成する。
今回は民具の調査を優先するので、④は機会を改めて行うが、必要に応じて調査を取っておく。その内容をデータ化する。同時に保存状態に合わせて、可能な掃除や保存処

理をする。

ii) 詳細調査

- ①農業や産業について調べる
- ②郷土の自然環境の特徴（地形・気候）を調べる。
- ③郷土の歴史を調べる。
- ④昔の暮らし方（生活様式）を調べ、現代の生活様式や道具と比較する。

この調査によりわかる現代の生活と比較できる内容のデータを(1)の基礎データに盛り込み、さらに詳細なデータを作っていく。

iii) 公開用の成果物（ハンドアウト、キャプション、ワークシート）の作成

展示物の解説文や、来館者が持ち帰り学習効果を高めるハンドアウトの作成を行う。また、学校見学に対応できる教材を作成する。

i)・ii) で作成した小学校の社会科の学習項目にあわせて、小学校のカリキュラムにあわせた教材などを作成していく。

学習指導要領や越谷市教育委員会作成の副読本『わたしたちの越谷』の以下の項目、「わたしたちのくらしとものをつくる仕事（農家のしごと・工場のしごと）」「今にのこの昔のくらしのうつりかわり（くらしと道具）」「きょう土を開く（用水の開発）」も参照しながら、小学生や一般の利用者にわかりやすい教材を作っていくこととする⁴⁾。古民家に於いて、これらの単元を体験的に学び、学校での予習復習に役立つワークシート作りを目指す。

社会科見学に利用するワークシート作成では、今回の作業により集積した経験と知識を使い、教育指導要領に沿って、単元ごとに資料を提示し、わかりやすい内容の展示を行うことを目指す。

古民家と民具などの文化財を調査する作業を行ったことにより、地域の歴史や文化を取り込んだデータを作成することが可能となる。この知識をもとに、教師が授業に利用しやす

く、小学生が予習復習をしやすい内容の展示とワークシートを作成することにより、地域住民には地域の歴史を伝え、学校教育では文化財を効果的に活用した観念的ではないわかりやすい授業を行うことが可能になる。博物館では展示内容や解説文（キャプション）は、小学生が理解できる内容としている。今回は社会科見学の年齢を鑑み小学3年生以上が理解できる内容とした。子どもにわかりやすい展示は、大人も楽しめるものであり、知的好奇心の入り口となる。子どもも大人も「自分で学ぶことの楽しみ」を見つけられる内容の展示やワークシートの作成を目指し、今回の作業を進めていくこととする。

X 作業の発展性

集積したデータを利用した古民家内の民具や農具の展示を目指す。それにより、社会科見学などの用途にあわせた展示替えや、研究などの資料活用が臨機応変に可能になる。

学習や見学に用いる図録の作成も可能となるのである。

以上が、実際の作業工程を学生に向けた資料調査の概要と手引書である。

文化財の取り扱いと、調査方法、テーマ選定方法などをまとめたこの調査の手引書をもとに、民具の調査を実施した。手引書の内容にそって準備を行い、2016年8月30日から9月3日にかけて実際の調査を実施した。

六本木と村田の指導と管理のもと、学生たちの安全を第一に、作業を適切に進めていった。学生たちは、調査の事前に文化財の扱いに関しては学び、次代に手渡す資料の安全性に細心の注意を払いながら調査作業を行っていった。熱心な作業の進行の中で、学校教育経験者と、地域の民俗に詳しい専門家による指導も受け、学校教育に活用するワークシートと地域に開かれた展示に、地域資料の内容も反映させていくことが出来た。

さらに、単元「きょう土を開く」にも応用

すべく古民家の成り立ちや地域の歴史に関しては、学生が自主的に地域住民への聞き取り調査も実施し、今まで不明だったことが解明され、その内容は教材作成に反映されている。聞き取り調査により、地域住民の協力が得られ、住民の地域文化への愛着を知ることが出来たことは、学生の地域学習や地域との協働のマネジメント力を培うことにもなった。

また、古民家や資料の掃除、移動、実際に資料を触り使うことによって、民具の使用体験が出来た。この体験により学生は、教科書や写真だけではなく、実感を持った授業や解説を作成する能力を培ったのである。子どもに対して具体的に実感を持った説明をするということは、歴史・文化の継承という側面からも非常に重要な成果である。民具は地域により同じ用途でも形状や使い方が異なる場合がある。またその地域にしかない物もあり、地域性や時代性を色濃く反映するものである。そういった背景を持つ資料を体験することは、今後授業に於いて実感を以て教材にすることが出来る能力となる。このことは、地域教育を深化させることでもある。また、地域の歴史・文化を次代に継承することにもつながってゆくのである。

5 文化財活用事業の成果と今後の課題

5-1 事業の成果

(1) 社会科見学対応について

- ①小学校3・4年生の地域学習の一単位である「古くから残る暮らしにかかわる道具、それらを使っていたころの暮らしの様子」の学習で活用できる展示の作成と、体験学習とワークシートを用いた見学を実施した。
- ②古民家の展示図録を作成し、市内の小学校に配布することにより、予習、復習、評価など社会科見学における教員の指導計画が立てやすくなった。
- ③教員が文化財活用を授業に取り入れる利点を考える契機となった。

(2) 教員志望の学生の資質向上について

- ①民家で暮らした道具を整理し、実際に触れ、使い方を習得することにより、民具の使用体験のある教員として子どもたちへの具体的な解説が可能になった。
- ②聞き取り調査をすることにより、昔の暮らしの道具を使っていた人々の考え方、地域の成り立ちを知ることが出来、地域と協力しあう地域学習の取り組み方を考える契機となった。同時に資料の学問的価値を知ることにより、歴史文化を広い視野で俯瞰することも可能となった。
- ③文化財を教材とする方法論を学べた。

(3) 古民家の生涯教育施設としての活用について

- ①雑然と配置されていた資料を、適切な位置に移動し、生活感を感じる展示となった。古民家が利用されていた年代や、部屋の用途によって昔の暮らしを迫体験できる展示に生まれ変わった。
- ②キャプションや、写真と図解のパネルを配置し、子どもだけでなく大人もわかりやすい展示となった。
- ③資料の学問的な位置づけを来館者に知らせることにより、地域資料への興味と愛着を持たせる内容となった。
- ④今後社会教育施設として利用者に合わせた資料の活用方法を考える端緒となった。

(1)～(3)の成果は、学校教育、生涯学習、そして地域住民の立場からも有意義な内容となっている。今回は、教育を主眼として、社会科見学における地域学習の充実に焦点を絞り、教員志望の学生を中心として、それぞれの分野の専門家が協力した結果、このような成果を得られたのである。

5-2 今後の課題

5-1のように、本事業は有意義な双方向性のある事業ではあるが、はじめに述べたように、博学連携は発展途上であり、事業スタイ

ルが確立されていない。更に、この発展途上の事業を、博物館を持たない自治体において実践する場合には、資料を有する地域との交渉により、信頼関係の構築が確立するまでは、博物館のある自治体よりも事業の成立が難しい面を持つ。しかしながら、今後も、同様の連携事業を行う際には、今回よりも積極的に広報し、博学連携を地域と共に進める事業としていくことが肝要である。事業を継続・発展させるためには、その効果を分析しながら、進めていく必要がある。そのためにも、今後、学校と博物館だけでなく、それぞれの地域の協力を得て、相互に機能する事業として、継続できる仕組みを作っていく必要がある。

地域には文化財や、歴史文化に関する地域住民の情報など、他にはない貴重な教育資源がある。この資料に対する調査や展示事業によって、学校と博物館と地域住民が互いに協力することが可能となる。

博物館やその他の生涯学習施設では、実物資料に接することが出来、他では得られない体験学習が出来る。資料の学問的な位置づけを知ることでも可能である。しかし、地域学習の入り口となる社会科見学を心に残る内容にするためには、興味を持ち自分で学びたいと思わせる体系的な見せ方が必要である。それは、人手も予算もかかる作業である。それでも、たゆまぬ努力を続けていかなければならないのは、幼少期から文化財や地域の歴史と文化に興味を持つことは、生きることを自ら考え生きる力を養うこととなる重要な学びになるからである。同時に、地域の歴史文化を学ぶことは広域を俯瞰し比較することの出来る思考もはぐくみ、物事に柔軟に対応する思考を持つことが可能になる。このような「学びの姿勢と方法」を知った子供は、生涯にわたって学び、困難を乗り越える力を得るのである。そのための装置、仕組み作りは、家庭、地域、学校だけでなく、社会で子供を教育する方法の一つなのである。

今回、小規模ながらも、中村家住宅の整備事業では、社会科見学を心に残る内容にするために、資料に興味を持ち自分で学びたいと思わせる体系的な見せ方をする展示や体験学習を実施したのである。その結果、次の三点の効果を生み出した。

- ①文化財だけでなく、大学・博物館・地域住民といった地域の人材を活用し、授業の学習効果を高める
- ②展示公開をはじめ解説等の教育普及事業を実施することにより、教育普及事業を実施することにより、生涯学習と学校教育の効果の地域への可視化をはかる
- ③地域の文化財を活用した展示や事業により、小学校のある地域住民の地域の歴史文化への理解と協力の促進をはかる

この三点の効果により、古民家が社会に開かれた教育を推進する装置となったのである。この①～③の作業を一連のサイクルとして、有機的に結びつける仕組みを作るために、事業を継続させてゆくことは、今後の課題として残っている。しかし、この取り組みは、地域の協力を得れば、さらに地域の歴史文化を深く知ることが出来、学校教育の教材だけではなく、地域全体での教育と歴史文化の継承を促す事業に発展させることが可能となる。

地域の中心のひとつは学校である。本事業の成果は、文化財を活用した社会科見学への対応を入りに、博物館や地域に残る文化財を活用し、学校現場だけでなく、日常生活の中に自分たちの文化を考え伝えていく場所と機会を作り出すことが出来る可能性を持つことを示している。学校と博物館が地域学習を進めることにより、地域の伝統文化を伝える装置として機能する仕組みを生み出すことも期待出来るのである。同時に、地域の文化財を学校教育の教材として利用する取り組みを教員志望の大学生が行うことにより、未来の教員の資質を向上させるとともに、学校現場の声を反映する文化財活用が効率的に出来る

内容であると言える。

このように、地域の歴史や民俗資料をただ収集し保存するだけでなく、研究成果を反映させた意味のある分かりやすい展示や学習教材化することにより、より資料への理解が深まっていくのである。当然、その作業には、人手と予算が伴う。経済状況が逼迫する中でも、大学、学校教育機関、生涯学習機関、地域が協力することにより、人員の確保と事業の補完が可能になることは、人手不足を補って余りある効果を生み出すのである。ただし、真に息の長い事業とするためには、博・学・民が協力する事業に於ける責任の所在と適切な予算配分が必要になる。それには協力規定を策定し、今回のような事業をモデルケースとして展開しながら、より円滑に事業運営できる仕組みを作る課題が残っている。課題解決のためにも、関係機関と話し合いながら、博・学・民（博物館・学校・地域）が、それぞれの立場で積極的に関与できるより充実した事業を目指していくことが必要である。

また、異なる地域との連携を図り、広報にも注力することによって、協力体制を確立し発展させていくことも求められるのである。

学びの入り口である学校での学習を、子どもと家族、または地域住民が体験できる「住民にひらかれた学校」としての機能を持つのが、生涯学習施設である。そして生涯学習施設や学校を支えるのもまた地域である。それぞれの立場で子供の教育に関わり、よりよい効果を生む事業のマネジメントができる能力を培うことも、この事業の大切な役割であり最大の課題なのである。

6 小括

今回の地域学習を拡充する協働事業では、それぞれの施設や機関などの専門性を生かしながら子どもの教育に当たることが求められる。何よりも、博物館と学校だけでなく、地域も含めて、それぞれの特質を発揮しながら、

連携・協力体制を作ることが、この事業の継続のための重要なポイントである。何故なら、教育も文化財の保存と活用も終点はなく永続していくものだからである。今後も博・学・民連携事業を継続、発展させるためにも、学校と地域が一体になって子どもの教育を進めようという機運を醸成することが何よりも大切である。

次稿後編では、大間野町旧中村家住宅の活用事例において明らかになった、成果と課題を踏まえて、社会科地域学習における文化財活用の意義を考究することにする。

註

- 1) 博物館法第三条2
- 2) 『地域に生きる博物館』徳島博物館研究(教育出版センター, 2002年)
『博物館をみんなの教室とするために—学校と博物館がいっしょに創る「総合的な学習の時間」』堀田龍也・高田浩二 編(高陵社書店, 2003年)
『地域を変えるミュージアム——未来を育む場のデザイン』玉村雅敏(英治出版2013年), 『もっと博物館が好き!—みんなと歩む学芸員—』四国ミュージアム研究会(教育出版センター, 2016), 文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」採択一覧 以上参照
- 3) 「生涯学習としての「博物館における教育普及活動」」(「山梨学院生涯学習センター紀要 p 43-75」2013年)
「地域みんなで子供たちの未来を考えるワークショップのすすめ—地域とともにある学校づくりに向けて—」(平成26年度文部科学省委託事業 学校の総合マネジメント力の強化に関する調査研究 ノースプロダクション, p 11,15 2014年)
越谷市旧東方村中村家住宅における「昔のくらしを感じる講座」(講師村田三恵)におけるアンケート集計結果の分析, 以

上参照

- 4) 『わたしたちの越谷 環境教育資料しらべと』(越谷市教育委員会, 2016年)

参考文献

- 『民俗資料調査収集の手びき』文化財保護委員会事務局記念物課
『民具資料調査整理の実務』宮本馨太郎(柏書房, 1975年)
『民具学の提唱』宮本常一(未来社, 1979年)
「民具研究の軌跡と将来」『国立歴史民俗博物館研究報告第三集』岩井宏實(国立民俗博物館, 1984年)
『講座 日本の民俗学9 民具と民俗』赤田光男, 香月洋一郎, 小松和彦, 野本寛一, 福田アジオ編(雄山閣, 2002年)
『高知県立歴史民俗資料館研究紀要第17号』(財団法人 高知県文化財団 高知県立歴史民俗資料館, 2008年)
『文化財の保存と修復13 みんなぞく資料をまもる』一般社団法人 文化財保存修復学会編(クパプロ, 2011年)
『文化財の保存と修復14災害から文化財をまもる』一般社団法人 文化財保存修復学会編(クパプロ, 2012年)